

第2章 事例集作成フォーマットのねらいと解説

研修班 副班長 吉良健司（在宅りはびり研究所）

2016-2017 年度版、事例報告集用の事例作成フォーマットは、2015 年度的事例集を分析する中で見えてきた活動・参加につながるポイントを端的にプロセスとしてまとめたものです。全国から集まってきた沢山の事例から見えてきた活動・参加につながるポイントとは、対象者の強み（環境も含む）の活用です。うまく活用ができていない事例は活動・参加につながり、活用できていない事例はつながらない。もちろん、対象者の医学的重症度も影響しますが、それ以上に強みの活用の有無が大きく影響します。

そこで、2016-2017 年度的事例収集フォーマットは、従来の事例の医学的な評価にプラスして、対象者と環境の強みの評価をして頂き、その結果を生活目標に落とし込んで、なおかつリハビリテーションプログラムにも絡めて頂くことで、確実に活動・参加につながるプロセスを書式化しました（表 1）。また、記入見本も準備しました（表 2）。この新しい方法論に基づく事例収集において、更なる活動・参加につながるアプローチポイントを分析します。

訪問リハ事例	No.	対象者の強みを活用して活動・参加につながった事例	
事例	年齢： 性別： 介護度：	経過	発症から訪問リハ開始までの経過は・・・
	疾患名： 生活歴： 本人家族の希望：		
開始時の状態と活動・参加		実現したい生活目標（予後予測）	アプローチ後の活動・参加
訪問リハ開始時の状態としては・・・		意欲の出る具体的な生活目標は・・・	アプローチした結果、心身機能・活動・参加がどのように変化したか？・・・
<div style="border: 1px solid gray; width: 80px; height: 40px; margin: 0 auto; text-align: center;">例) 写真</div>		リハアプローチ内容	
		生活目標を実現する心身機能・活動・参加のバランスの取れたアプローチ・・・ 医療者視点と対象者の自己実現の視点をバランスよく・・・	
強み評価		<div style="border: 1px solid gray; width: 100px; height: 40px; margin: 0 auto; text-align: center;">例) 写真</div>	<div style="border: 1px solid gray; width: 100px; height: 40px; margin: 0 auto; text-align: center;">例) 写真</div>
リハ目標やプロセスに活かせる強みは・・・			
まとめ	この事例の総括と、うまくいったポイント、うまくいかなかったポイントを振り返って要約してください。全体を通して、うまく活動・参加につながるためのコツを解説してください。		分類

表 1 2016-2017 年度版 事例収集フォーマット

訪問リハ事例	モデル	くも膜下出血後の障害を持ちながらもボランティア活動までつながった事例	
事例	56歳男性、くも膜下出血、左片麻痺、高次脳機能障害、半盲 生活歴：造船所の塗装工、趣味は海釣り 本人の希望：自転車に乗り、買い物が行きたい	経過	発症後、妻に離婚される。急性期病院で看護師の目を盗んで車いすで屋上へ行くも麻痺で飛び降りれず。それ以来前向きになり、回復期病院を経て、独居の自宅に退院。訪問リハ週2回開始。
開始時の状態と活動・参加	実現したい生活目標（予後予測）	アプローチ後の活動・参加	
屋内歩行は独歩、屋外はT杖使用し、ADL自立。独居生活は何とかなるが、左片麻痺と高次脳機能障害により一部支援が必要。一人での外出は困難。日常的な社会交流なし。 	・自転車で買い物に行けるようになる ・友人とイカ釣りに行けるようになる	週2から段階的に訪問減らし、3年で卒業。IADL自立、自転車自立。自主グループでは会長に就任し、みんなの見本となるようカラダ作り・趣味・仕事・結婚・ボランティア活動に頑張っている。 	
強み評価	リハアプローチ内容		
・前向き思考、負けず嫌い ・友達とイカ釣りいきたい ・自転車にまた乗りたい ・人との交流が好き	○訪問リハ（週2回） ・服薬管理、IADL訓練、外出・自転車訓練、生活助言、パソコン指導 ○脳卒中自主グループ ・ピアカウンセリング ・釣り等の体験 ・仕事体験 		
まとめ	退院当初は、片麻痺と高次脳の影響あり、IADLの組み立てに戸惑ったり、失敗することもあった。訪問リハで一つ一つ確認・相談しながら進めたことで、生活スキルや安全性が向上。同時進行で脳卒中グループの仲間と出会い、会長への就任で利他意識が芽生え、仲間との切磋琢磨と専門職のアドバイスで飛躍的に活動・参加が広がった。現在も進化中。 	分類	3

表2 2016-2017年度版 事例収集フォーマット 記入事例

<記入ポイントの解説>

- ①事例：対象者の年齢や性別、介護度や疾患名、生活歴といった基本情報から本人・家族の希望を記入します。
- ②経過：発症から訪問リハ開始までの経過を記入します。
- ③開始時の状態と活動・参加：訪問リハ開始時の初期評価の全身状態、心身機能と活動・参加の状態と記入します。
- ④強み評価：強みの種類シートを使って、対象者の「人の性質・性格」、「技能・才能」、「関心・願望」、「環境」のカテゴリーの例を参考に、対象者から強みを問診又は観察します（表3）。この表は、チャールズ・A・ラップ¹⁾によるストレングスモデルの4つのカテゴリーを一部改変したものです。もともとストレングスモデルは、精神障害者の地域統合に向けたソーシャルワークの手法として体系化されたものです。

事例フォーマットへは特に影響力の高い強みを記入します。（例：負けず嫌い、歌が好き、孫が好き、協力的な家族がいるなど）

強みの種類

対象者の強みは下記の表を参考に、ご本人・ご家族等より
問診・観察し、リハ目標やプロセスに活用してください。

人の性質・性格	技能・才能	関心・願望	環境
正直である	金銭管理が正確	温泉が好き	家族がいる
思いやりがある	記憶力が高い	魚釣りが好き	ペットがいる
親切である	花をいけられる	孫が好き	自宅が住みやすい
辛抱強い	裁縫が得意	人の役に立ちたい	親友がいる
感性が豊か	人生経験が豊富	料理を教えたい	信頼できるケアマネ
話し好き	歌が好き	将来の夢がある	経済的余裕がある
世話好き	家庭で役割がある	旅行に行きたい	近くに商店街がある
几帳面である	絵がうまい	仕事が好き	サロン仲間がいる

出典：チャールズ・A・ラッブ「ストレングスマデル」一部改変

**上手くいかないことが多い人生だからこそ、対象者の強みを強調した
生活やリハビリを積極的に推進しましょう！**

表3 強みの種類

⑤実現したい生活目標（予後予測）

従来のリハビリーションにおける目標は、筋力の回復や屋内歩行自立といった機能改善や基本的動作の改善を目標として挙げる場合が多いですが、活動・参加につながるプロセスにおいては当事者目線の生活目標を記入します。その際、その人の持っている強みを活かした生活目標設定に留意し、その目標があることにより、意欲が出たり、ワクワクするようなより具体的な生活目標設定を対象者と一緒に決め、記入します。

⑥リハアプローチ内容

対象者が達成したい生活目標を実現するための、心身機能、活動、参加のバランスのとれたプログラムを立て、記入します。状態の改善や悪化の予防につながる医療従事者視点と、対象者の自己実現の視点をバランスよく取り入れたリハプログラムが重要です。特に対象者の強みを絡めたリハプログラムが効果的なアプローチのポイントになります。

⑦アプローチ後の活動・参加

対象者が実現したい生活目標に向かって、強みを絡めたプログラムを進め、得られた心身機能、活動、参加の結果を記入します。

⑧まとめ

この事例の総括と、うまくいったポイント、うまくいかなかったポイントを振り返って要約して記入します。全体を通して、うまく活動・参加につながるためのコツを解説してください。

⑨分類

まとめた事例が以下の10項目のカテゴリーのどれに該当するかを分析し、記入します。

- 1 : 地域の活動に継続的に参加
- 2 : 外出や行事に参加できた
- 3 : 仕事・趣味の再開
- 4 : 在宅継続
- 5 : 非該当になった・サービス利用が終了した
- 6 : 家族支援により、活動・参加が広がった
- 7 : 役割につながった（家庭内外・主体的）
- 8 : 幸福感を獲得した
- 9 : 自宅での看取り
- 10 : その他

⑩全体を通して

この事例フォーマット自体が、活動・参加につなげるための新しいリハビリアプローチプロセスになります。従来は、医学的な弱み（ウィークネス）に焦点を当て、治療や強化を通じた問題解決（ウィークネスアプローチ）を推進してきましたが、高齢者や障がい者、療養者の生活再建や人としての復権においては、その手法だけでは課題は解決せず、日々直面する生活の失敗体験により自己効力感が低下し、抑うつ状態になる事例が少なくありません。生活期において加齢や病気、ケガに伴う機能低下を治すリハビリテーションアプローチも大切ですが、回復に時間がかかったり、後遺症が継続する又は機能低下が進む状態においては、ウィークネスアプローチ一辺倒は対象者の抑うつを助長させてしまうことがあります。加齢や病気、ケガがあっても自分らしい生活を送ることができることを体験しながら、加齢や病気、ケガと共に暮らす前向きな価値観への転換を図ることが、より長期にわたる心身機能改善にもつながり、もっとも効果の高いリハビリテーションアプローチ手法になります。その具体的手法がその人の強み（ストレンクス）に焦点を当てるストレンクスアプローチの併用になります。生活期リハビリテーションにおいて一番大事なポイントとなる方法論です。

その人の強みに焦点を当て、強みを活かした生活目標やリハビリプログラムを実行することによって、本人の意欲を引き出し、生活における成功体験を促し、結果、自己効力感が改善し、より主体的、積極的な意識や行動が引き出されることも少なくありません。

人としての復権のリハビリテーションを推進しようとするれば、その人の医学的な弱みに焦点を当てるウィークネスモデルを基礎としながらも、その人の個性や環境といった個別性の強みの部分に焦点を当てるストレンクスアプローチをより強調して推進することが、自分らしさや満足のいく人生を感じられるアプローチ手法になります。これが真の人としての復権につながるリハビリテーションへのパラダイムシフトであり、原点回帰でもあります。

<参考文献>

- 1) チャールズ・A・ラップ：ストレンクスモデル,P135,2014